

年賀状についての雑考

1月24日、お年玉付年賀状の抽選がありました。50円の花ガキに付随した幸運——そんなに期待すべきものではないでしょうが“それでも”と当選番号にあわせてチェックしてみました。結果は、なんと約300枚のなかで5等の切手シート1枚のみ。例年は少なくとも5~6枚は当たってきたのに、今年の(自分の)確率の低さはどうしたことか！ 5等は100枚中2枚は当たる計算になっているから、これはよほどの“幸運不足”なのかもしれませんね。

ま、“もともと”とそんな落胆することでもないので、この機会にもう一度1枚1枚を読み返しながら住所録の整理をしました。小中学校、高校時代の同期の仲間は、今年から来年にかけて「古希」を迎えます。多くの文面がそんな感慨や決意を綴っています。一方で、いつも賀状をいただいている方からや、こちらが出したのに音信のない人もいました。歳だけにどうしたのだろうか、体調を崩してはいないだろうか、なんて心配されるところです。



「あて所に尋ねあたりません」と戻ってきたのが数通。それに賀状の中に移転や地名変更のお知らせを併記してあるものもあります。

そういえば、暮に「喪中ですので」と年賀状遠慮の花ガキをいただいた人も10数人いました。出色は「こちらから年賀状は出せませんが、いただく方は大歓迎です。元旦に年賀状がないというのはよけいに寂しく感じますから」との挨拶状でした。その気持ちよく理解できますよ。考え方に大賛成。当人宛の私の賀状には、他の人にも倍加して、いろいろな言葉や激励を書き添えたものです。

添え書きといえば、受け取るものにも是非あって欲しいですね。例年、賀状の半分近くは印刷された文面だけ。これだと、仮に100通を読むのにも10分ほどで終わってしまう。送り主の確認だけのようなものだからです。一年で最もゆったりとした時なのですから、もう少し時間をかけて読ませてくれるものがあってもよいのではないのでしょうか。

そこで私自身は、10年ほど前から、少々長めの近況報告やエッセイを綴るようにしています。新年早々に長い文言は、古来のしきたりに反するかもしれませんが、心にも時間にもゆとりのある正月には、こちらのメッセージを伝え、また楽しんでいただければ、との思いからなのです。



ところで、お年玉の抽選日はかつては15日でした。なぜ遅くなったかの理由も思い出せませんが、このように延びるといろんな面で不都合を感じます。早く整理をして次の仕事に進みたいのに、いつまでも正月を引きずっているような気がするからです。“お年玉”への関心も薄れてしまう。「抽選を早くして」とは大部分の人の思いではないですかね！？あらためて関係機関での検討をお願いしたいものです。